

早稲田大学大学院 文学研究科
博士学位論文概要書

仏教論理学派における対象認識論の成立と展開

三代 舞

論文要旨

本学位論文は、インド後期大乘仏教における仏教論理学派の知覚論をテーマとし、特に、対象認識について焦点をあてたものである。仏教論理学派における対象認識論の成立と展開と題して、仏教論理学派の創始者といわれるディグナーガ (Dignāga, ca. 480–540), 大成者ダルマキールティ (Dharmakīrti, ca. 600–660), そして、後継者の中からダルモッタラ (Dharmottara, ca. 740–800) とプラジュニャーカラグプタ (Prajñākaragupta, ca. 750–810) の2人を選び、知覚 (pratyakṣa) における対象認識に関する彼らの理解について思想的観点からのアプローチを試みた。

議論の中心的位置を占めるのが、仏教論理学派独自の所説である、認識手段 (pramāṇa) と認識結果 (pramāṇaphala) の非別体説である。本研究が扱う範囲において、認識手段は対象形象性 ([pra]meyarūpatā) を、認識結果は対象認識 (prameyādhigati) をそれぞれ具体的に指し示しており、いずれも同一の瞬間的な知覚知に属している。よって、両者は知のもつ性質 (dharma) としてのみ区別されるのであって、実体 (vastu) としては区別されないということになる。そこで、認識の内部に現れる対象形象と対象認識との関係をどのように捉えるか、さらに、知覚による対象認識から行動へのプロセスをどのように考えるか、といった問題について、諸論師による理解をサンスクリット語原典およびチベット語訳テキストに沿って考察した。なお、それぞれの論師の思想内容の理解には、主に以下のようなテキストを使用した。

ディグナーガ	<i>Pramāṇasamuccaya</i> (PS) I 8cd
ダルマキールティ	<i>Pramāṇavārttika</i> (PV) III 301–319, <i>Pramāṇaviniścaya</i> (PVin) I 34–37
ダルモッタラ	<i>Nyāyabinduṭīkā</i> (NBṬ) ad <i>Nyāyabindu</i> (NB) I 1; 18–21, それと関連する <i>Pramāṇaviniścayaṭīkā</i> (PVinṬ(Dh)) および <i>Laghupramāṇyaparīkṣā</i> (PPar II)
プラジュニャーカラグプタ	<i>Pramāṇavārttikālaṃkāra</i> (PVA) ad PV III 311

ディグナーガの PS およびダルマキールティの PV に見える知覚論については、Hattori [1968] や戸崎 [1979] といった詳細な研究が既になされているが、近年、新たに発見された写本に基づいて、ダルマキールティの PVin のサンスクリットテキストが出版された。したがって、本研究では特に、PV には見られない PVin 独自の内容を含む箇所注目しながら、まず、ディグナーガからダルマキールティに至るまでの対象認識論に関する文献解説および分析を行った。

次に、ダルモッタラとプラジュニャーカラグプタについて、両者の解釈の間に明らかに対立関係があることに着眼し、その相違点について論じた。彼らがいくつかの重要な論題において対立した立場をとり、特に知覚論においては知と形象との関わりについ

て異なる解釈を行うことは、既に Iwata [1991] や小野 [1995] といった先行研究によって既に解明されている。本研究は、それと同一の方向性を示すものとして、知覚における対象認識の位置付けや、認識手段と認識結果との非別体説においても、両者が明瞭な形で対立した立場をとるという点を、新たに明らかにした。

両者の解釈の違いは以下の通りである。まず、仏教論理学派において、知覚は分別すなわち概念的構想を離れたものであると定義されている。その場合に、知覚がどのように対象認識という作用を完了し、対象への行動といった後続するプロセスを引き起こすかという点が争点となる。そこで、ダルモッタラが、知覚と後続する分別知とを組み合わせるのに対して、プラジュニャーカラグプタは、そのような分別知の介在を否定し、あくまでも知覚単体で対象認識という作用を完了するという立場をとる。またその際に、プラジュニャーカラグプタが認識手段と認識結果との同一性を強調する点にも、ダルモッタラとの違いを見ることができる。

本研究の構成

本学位申請論文は、第1部の論考および第2部の原典研究からなる。それぞれの構成は、以下の通りである。

第1部 論考——仏教論理学派における対象認識論の成立と展開——

第1章 序論

第1章では、序論として、仏教論理学派における対象認識論の概要について触れた後に、研究史と本研究の目的および手法を述べる。

第2章 仏教論理学派における「プラマーナ」(pramāṇa)

第2章では、導入として、仏教論理学派におけるプラマーナ論の中での、対象認識論の位置付けを探る。プラマーナという語のもつ二つの意味とその関係について、仏教論理学派による理解の特徴を、ニャーヤ学派による理解との比較を通じて明らかにする。

第3章 ダルマキールティにおける対象認識

第3章では、ディグナーガからダルマキールティに至る間に見られる、対象認識論の成立について扱う。特に、対象認識論において中心的な位置を占める、認識手段と認識結果の非別体説について、ディグナーガの PS とダルマキールティの PV および PVin の記述に従って考察する。

第4章 ダルモッタラにおける対象認識

第4章および第5章では、註釈者による対象認識論の展開を扱い、特に、ダルモータラとプラジュニャーカラグプタによる、認識手段と認識結果の非別体説に対する解釈の違いに焦点をあてる。そのうち、第4章ではまず、ダルモータラの理解を取り上げ、NBṬ や PVinṬ(Dh), PPar II に従って考察する。

第5章 プラジュニャーカラグプタにおける対象認識

第5章では、プラジュニャーカラグプタによる対象認識の理解を取り上げる。前章で取り上げたダルモータラの説に対して、プラジュニャーカラグプタは批判的な態度を取る。PVA ad PV III 311 の解説を通じて、その相違点を探る。

第6章 結論

第6章では、結論として、以上の論考により明らかにされた内容をまとめた上で、残された課題について簡単に触れる。

第2部 *Pramāṇaviniścaya* I 34–37 原典研究

本研究の第2部には、PVin I 30,9–32,10 (vv. 34–37) に関する原典研究の成果として、以下のものが含まれている。

1. 科段
2. サンスクリットテキスト・チベット語訳テキスト対照表
3. 和訳
4. ダルモータラ註のチベット語訳テキスト
5. ジュニャーナシュリーバドラ註のチベット語訳テキスト
6. プトン註のチベット語訳テキスト

本研究の概要

以下に、本研究第1部の論考により明らかにされた内容について、本論の順に従ってまとめた上で、残された課題について終わりに述べる。

1. 仏教論理学派における対象認識論の概要

第1章では、序論として、仏教論理学派における対象認識論の概要を明らかにした後、研究史と本研究の目的および手法が述べられた。そのうち、特に仏教論理学派における対象認識論の概要について、ここでまとめておく。

古代インドでは一般的に、認識の成立に際して、認識主体 (*pramāṭṛ*)、認識対象 (*prameya*)、

認識手段 (pramāṇa), 認識結果 (pramiti, pramāṇaphala) という四つの要素が認められている。これらの要素は、外界実在論に立つバラモン系の思想家達によっては、全て別個の実体であると考えられているが、それに対して仏教論理学派は、認識手段と認識結果の非別体説という特異な説を打ち立てた。さらに、本研究が扱う範囲において、それぞれが指し示す具体的な内容は以下の通りである。

認識手段	対象形象性 ((pra)meyarūpatā) = 対象同一形象性 (arthasārūpya)
認識結果	対象認識 (prameyādhigati, arthapratīti)

本研究で主題とされる「対象認識」とは、ここで認識結果として言及される「対象を認識すること」に他ならない。しかしながら、ダルマキールティ自身は対象認識について、それが認識結果であるということと、対象に応じて区別されるものであるということとを述べるのみであり、それ以上の積極的な議論を展開することはない。外界実在論者たる対論者も認める共通の出発点として仮に認められたものに過ぎないのである。

しかしながら、ダルマキールティの認識論の体系の中で、対象認識は決してそのような消極的な意義のみを有するわけではない。というのも、ダルマキールティは、プラマーナが有する知としての妥当性を、当該の対象への到達との整合性に基づいて規定している。そのため、必然的に、対象と知との最も直接的な関わり合いである対象認識が、彼のプラマーナ論の中で重要な位置を占めることになる。

それでは、知覚において対象認識と行動とがどのように関わるのだろうか。仏教論理学派では、プラマーナを知覚と推論 (anumāna) の二種とした上で、両者のあり方を明確に区分している。すなわち、知覚は構想作用を欠いた無分別なる (kalpanāpoḍha) 知であり、一切の言語 (abhilāpa) との関わりを離れている。このような純粋な無分別知たる知覚から、どのようにして行動が起こりうるのかという問題は、容易には解決されない。

以上のような問題意識に基づいて、その後の註釈者たちは対象認識に関する考察を深めた。しかし、その内容を注意深く見ていくと、必ずしもその見解が一致したものではないことが分かる。特に、ほぼ同時代に活躍したと考えられているダルモッタラとブラジュニャーカラグプタとの間には明瞭な対立関係を読みとることができる。両者の解釈の相違点は、対象認識の捉え方を軸に、知覚とその後認知プロセスとの関わり方や、認識手段とその結果との関係性に関する理解の違いへと広がっているのである。したがって、本研究では、両者の解釈の違いに注目することにした。

2. 仏教論理学派における「プラマーナ」(pramāṇa) の意味

第2章では、認識論の重要な術語として当時インドで広く用いられていた「プラマーナ」という語が、仏教論理学派においてどのように使用されるのかを確認した上で、そ

の特徴を、ニヤーヤ学派との比較を通じて明らかにした。

仏教論理学派においてプラマーナの語は、主に、「正しい知」(samyagjñāna)と「正しい知の手段」(pramākarāṇa)という二つの意味で用いられる。そして、知覚や推論を指示する場合の正しい知たるプラマーナは、認識手段と認識結果という対立概念によって分析された場合には、むしろ認識結果に該当せられるべきものである。その場合のプラマーナという語は、プラマーナの結果／認識結果に対して転義的に用いられている。

プラマーナが正しい知を意味すること自体は、むしろニヤーヤ学派等にも見られる一般的な用法であり、仏教論理学派独自のものではない。しかし、ウッディヨータカラ等のニヤーヤ学派の論師たちは、-ana接尾辞の文法的分析に基づいた正当な方策によって、知すなわち対象認識がプラマーナがであることを根拠付けた上で、常にそれとは別個に、捨・取・無関心という知(hānopādānopekṣābuddhi)というプラマーナの結果を設定している。それに対して、仏教論理学派の論師たちが、認識結果たる知に対して本来は手段を意味するプラマーナという語を転義的に用いたと考えることによって、別個にプラマーナの結果を設定することを回避したという点は、特徴的である。よって、このような転義的用法は、認識手段と認識結果の非別体説という仏教論理学派独自の思想的立場によるものと考えられることができる。

3. ダルマキールティにおける対象認識

第3章では、仏教論理学派の対象認識論の要である認識手段と認識結果との非別体説について、ディグナーガからダルマキールティへと順を追って論じた。

その結果、まず、ダルマキールティによる認識手段と認識結果との非別体説の重要な点として、以下の点が明らかにされた。すなわち、彼は、「認識手段とは対象に応じて知を限定する要因である」として、ディグナーガの段階でははっきりとは述べられていなかった、認識手段のもつ、知およびその認識作用に対する働きを明示している。さらに、この認識手段に関する独自の定義に基づいて、認識手段とは対象の形象をもつことであるということを積極的に論証しようとしている。

次に、その論証の内容について、PVとPVinを合わせて検討しながら詳しく論じた。PVinでは、対象の形象をもつこと以外のもは認識手段としては不適當であるということを示すために、認識手段として四つのパターンを想定している。すなわち、感官(indriya)、外的対象にある(arthagata)形象(ākāra)、特殊な感受(anubhavaviśeṣa)、知自身にある対象の形象、の四つであり、前者二つが外的要因、後者二つが内的要因である。この中、第一の外的な要因たる感官は、対象に応じた区別をもたないという理由によって否定され、第二の外的な要因たる外的対象にある形象は、知を通じてしか知られないという理由によって否定される。さらに、第三の特殊な感受は、内的な要因ではあるが、はっきりと規定されていない(anirūpita)という理由によって否定される。以上の

ような段階を経て、第四の知の本性としての対象の形象が、対象に応じた区別をもち、かつはっきりと規定されるものであるから、認識手段として妥当であるという結論に至る。

4. ダルモータラにおける対象認識

第4章では、まず初めに、ダルモータラによるプラマーナおよびプラマーナの結果の定義を確認した。彼によれば、正しい知 (samyagiñāna) たるプラマーナとは、人を「対象に向かって行動させる (pravartaka) 知」すなわち「対象に到達せしめる (prāpaka) 知」であり、さらに、「行動の対象を示す (pradarśaka) 知」および「対象を判別する (paricchedaka) 知」と言い換えられる。一方、プラマーナの結果は、そのような到達せしめる知のもつ、到達せしめる作用 (vyāpāra) であり、「行動の対象を示すこと」(pravṛtṭiṣayapradarśana) および「対象を認識すること」(arthapratīti) と言い換えられる。

次に、その行動や判別の対象について、瞬間的な存在である「把握対象」(grāhya) と時間的幅をもった「判断対象」(adhyavaseya) という二種の知覚対象の観点から考察を加えた。この二種の対象に関連して、把握作用を為す知覚と、その後を生じる、判断作用を為す決定知という認識プロセスが確認された。さらにこのことから、これら行動や判別の対象が、いずれも、時間的幅をもった判断対象であり、目的達成 (arthakriyā) との密接な関係を有することが明らかになった。

最後に、この二種の対象に関連する、知覚と決定知という認識プロセスは、行動の前提となる知覚と決定知の場合にも類似することが分かった。ここでは、青などの対象と同一の形象をもった無分別なる感受すなわち知覚が生じ、その後、その知覚について決定 (avasthā) を行う決定知 (niścayapratyaya) たる分別知 (vikalpapratyaya) が生じる。先行する知覚が、青などの特定の対象の認識であることは、後の分別知による判断を待って、初めて決定される。したがって、青の認識という対象認識そのものは無分別なものとして存在するが、それが青の認識であることは後の分別を通してのみ理解される。

5. プラジュニャーカラグプタにおける対象認識

第5章では、まず、PVA ad PV III 311 の解説を通じて、以下のことが明らかとなった。ダルマキールティによって、認識手段は「知が認識対象の形象をもつこと」(meyarūpatā)、認識結果は「認識対象の認識」(prameyādhigati) とされるのに対して、プラジュニャーカラグプタは、前者を「知がそれぞれに限定された形象をもつこと」(pratiniyatākāratā)、後者を「それぞれに限定された対象の確立」(pratiniyatārthavyavasthā) 等と言い換えて理解する。そして、両者は同一のものであるから、その間に、対象の近在性や感官の健全

性、決定といった別の要素が入り込む余地は認められない。

また、ダルモータラと目される論者との対論の中で、プラジュニャーカラグプタは決定 (niścaya) に関する以下のような説を提示している。すなわち、プラマーナが人の行動を引き起こすという機能を果たす上で、決定は不必要である。反復経験 (abhyāsa) が完全である場合には知覚が、それ以外の場合には推論がプラマーナとなるが、いずれの場合もそれ自体とは別個の決定に依拠することはなく、知覚知や推論知における形象のみに基づいて人の行動が起こる。

さらに、NBT 等に見えるダルモータラの決定知理解について概観し（この内容は、第 4 章で既に詳しく扱った）、PVA で批判される対論者説との比較を試みた。その結果、認識手段と認識結果との間に決定の介在を認めるという点で、そのダルモータラの理解と PVA に見える対論者の説とのおおよその一致が確認された。

6. ダルモータラとプラジュニャーカラグプタの対象認識に関する解釈の違い

ここで、本研究の第 4 章および第 5 章において考察されたダルモータラとプラジュニャーカラグプタの対象認識に関する解釈について、両者の相違点を整理された形でまとめておくことにする。

まず、認識手段と認識結果の非別体説に関する理解は、それぞれ以下のごとくである。

・ダルモータラ

知が対象の形象をもつこと（認識手段）と、その知がその特定の対象の知として確立されること（認識結果）の間には、後続する決定知の決定する働きが介在している。知覚に関する議論においても、決定知は確立作用を行う主体として重要な位置を占める。

・プラジュニャーカラグプタ

知が対象の形象をもつこと（認識手段）とその知が対象に従って限定的に確立されること（認識結果）とは、完全に同値である。よって、決定知などの第三の要素がその間に介在する余地はない。

また、知覚が人の行動を引き起こす際の決定知すなわち分別知の役割についても、以下のような解釈の違いがある。

・ダルモータラ

知覚が人の行動を引き起こすためには、知覚に後続する、知覚の内容を決定する知や、想起などの分別知が必要である。

・プラジュニャーカラグプタ

知覚が人の行動を引き起こすために、知覚に後続する分別知は不要である。むしろ、知覚の形象のみに基づいて行動が起こる。ただしその場合には、当該の対象に対して、既に十分な反復経験を備えていることが前提となる。

なお、ここでは詳しくは述べないが、このような両者の解釈の違いは、「人の行動を引き起こすもの」(pravartaka)や「確立」(vyavasthā)といった概念の理解にも影響を与えている。

7. 今後の課題

以上のように、認識手段と認識結果の非別体説を仔細に検討することにより、認識の内部に現れる対象形象と対象認識との関係、さらに、知覚による対象認識から行動へのプロセスといった問題について、ダルモッタラとプラジュニャーカラグプタとの間には、重大な見解の相違があることが明らかになった。そこでまず問題となるのが、なぜこのような解釈の相違が生じたのか、ということである。

一つの可能性としては、本研究 1.2.4 で示唆したように、「形象虚偽論」と「有形象認識論」といった、知における対象形象に対する基本的な態度の違いが、このような解釈の相違に影響しているということが考えられる。しかしながら、結論を急ぐことはできない。これは、ダルモッタラやプラジュニャーカラグプタの知覚論の全体像の解明を目指す中で、より慎重に検討されるべき課題であろう。

さらに、このような解釈の相違は、ダルモッタラやプラジュニャーカラグプタ以前にも遡りうる。というのも、既にデーヴェンドラブッディ (Devendrabuddhi, ca. 630–690) とシャーキャブッディ (Śākyabuddhi, ca. 660–720) の間に、知覚が行動を引き起こす際の決定知の関わりについて、同様の見解の相違が窺われるからである。また、行為発動における決定や反復経験の影響といった論題に関する問題意識は、仏教内外を問わず多くの古代インドの思想家によって共有されており、関連する議論は散見される。したがって、より広い範囲、より広い問題意識による思想史的観点からの更なる検討が必要であろう。

また、両者の解釈の違いにおいて重要な働きを担う「決定」(niścaya)や「反復経験」(abhyāsa)といった概念についても、その意味が十分に明らかにされているとは言えない。これらは、様々な文脈において繰り返し登場する、いわば仏教論理学派のキーワードであるが、総合的な研究は未だなされていない。個別の文脈や論書における用例の分析を積み重ねた後に、それらを統合する作業が必要である。

以上のような、註釈者間の見解の相違に関する課題への取り組みを経た後に、あらためて、原点であるダルマキールティの著作に立ち返って考えてみたい。註釈者たちが、

これほどまでに異なったオリジナリティーを註釈に織り込んでいることが明らかになった以上、註釈に拠ることが、かえってダルマキールティの真意を汲むための妨げになるということもできよう。とはいえ、註釈に拠らずに、自らの理解のみを頼るというのも心許ない。註釈者たちによる解釈の違いとその経緯を踏まえておくことが、一つの方策となろう。

引用文献

- Hattori [1968] Masaaki Hattori, *Dignāga, On Perception*, Harvard University Press, Cambridge.
- Iwata [1991] Takashi Iwata, *Sahopalambhaniyama*, Franz Steiner Verlag, Stuttgart.
- 小野 [1995] 小野基, 「仏教論理学派の一系譜——プラジュニャーカラグプタとその後継者たち」, 『哲学・思想論集』 21, 142-162.
- 戸崎 [1979] 戸崎宏正, 『仏教認識論の研究——法称著『プラマーナ・ヴァールツェイカ』の現量論』 上巻, 大東出版社, 東京.